

---

# Twin Genesis Online

野衣本フーコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TwIn GEnEsIs OnLiNe

### 【ZPDF】

N7157Y

### 【作者名】

野衣本フーコ

### 【あらすじ】

TwIn GEnEsIs OnLiNe VRM MOP

Gの革命児。他の追随を許さない圧倒的なスペックを以て世界最高のゲームとなる…筈だった。

そう、ゲームの支配者たるAI 『ペンドント』の暴走が起きたまでは。

11/21 諸事情により、こちで掲載させて戴く事になりました。

?

これは 僕の戦いの記録。

この記録をつけ始めてから何日が経ったか…。  
よく覚えていない。

思い返せば色々な事があった。

初日から冤罪で牢獄にされるわ、友人にも置いてかれるわ、またまた牢獄送りになりそうになるわ、それから…！

キリがないので止めよう…テンション下がる…、

ゴホン…。

とにかく…明日には全ての決着が着くのだ。  
今は万全の状態で挑む事だけを考えよう…！

最後に、もしも、万が一俺が“脱落”したら  
いか、俺強いし。

無いこと書いても仕方無いか…ハツハツハ…！

第99層 『エンダスター』より記す

?

「まだか！？もう一時間は経ったぞ…。」

一際大きな盾を携えた大男の声が戦場を駆ける爆音を越えて届いた。

「『ベヒモス』のHP残量は！？」「一割弱です…。」「<sup>ヒール</sup>回復まだか！？クソッ…。」

飛び交う怒号や指示がここからだとよく聞こえる。

うとうん、中々良い眺めのう（笑）

ん？ルイスのヤツ今『臆病者』呼ばわりしやがった…！バリーもガ

ツンと言つてやれよ…！『アイツはそんな男じゃない…！』って…！

「『ベヒモス』のHP残量一割切りました…。」

おっと、出番みたいだ。

我らがリーダー、“白帝”ミカドが右手を挙げたのを合図に俺は動き出した。

第99層のボスモンスター『ベヒモス』の弱点であるその背後へと向かつて走る。

え？気付かれたらどうするつて？

愚問だな、ホント。

俺、今は透明人間だからバレないの（笑）  
ほらな、背後に立つても気付かれな  
「つまつー♪アブねーな才  
イツー！」

見えてんじゃねーのコイツ…？

「早くしら麁態紳士…！」「壁タンクの氣持ち替えろや…」「へマした  
らヤバしてやるからな…？」

その殺氣、ベヒモスに向けろよ。  
遊びが過ぎたのは認めるけど…。

れて、それじゃあサクッと倒しますか。

30分後。

それはもう鮮やかに背後から18連撃技をクリティカルヒットをせ  
てボス撃破！！

で、意氣揚々と仲間のもとに戻ったわけですよ、そしたら…

『わー、アイテム全部出してしまったつか…？』『それじゃあ誰がメ  
イトを殺るかジャンケンなー？』

皆さん、目が本気です。本気と書いてマジと読みます。

「何でだよー!?俺、役目は果たしたぞー!?!」

抗議、猛抗議、命の危機で黙つてられるか!!!

「テメエ…遊んでたる…?」

ヤクザみたいな口調のこの娘はレイナ。全身白のフリフリドレスみたいな格好の口リ顔少女は今日“も”どす黒いオーラを俺に“だけ”向けている。

要するにツンデレなんです。  
デレた事無いけどね

「ハツハツハ、モテる男はツラいな」(笑)

「お前ら下がつてろ、巻き添え食うからな。」

そう言って取り出したのはこれまた真っ白なバズーカ

「…………って、待った!!バズーカって対人用じゃないと思つんだ  
ケドー!?」

「それぐらい知つてゐつての、だからテメエ以外に向けたりしねえ  
よ。」

俺つて人として認知されてなかつたの!?

「はじめ」

「いやあああああああッ！－！」

これが、攻略組ギルド『白龍』の日常である。

VRMMORPG “TwIn GeNeSiS OnLiNe”。

実装版解禁日にログアウト不可となつたこのゲームは、製作者の陰謀では無くこのゲームのGMたるAI “ペンテント” の暴走によるものらしい。

唯一の脱出方法はゲームクリア、つまり100層のボスを倒す事らしい。

ここまでありがちな話だな、漫画やライトノベルでもよくある鉄板ネタだ。

あとはプレイヤーが手と手を取り合つて仲良く協力してめでたくクリア。

なら、どれほど良かつた事か……。

『このゲームでは全員が戻る事は不可能です。』

それが、支配者からの最後の言葉。

と言つても、俺は聞いたわけじゃない。

その言葉を直に聞いたのは当時のトッププレイヤーのみだ。

『“白”と“黒”、“魔王”的命を絶つた陣営にのみ『えられる権利なのです。どちらかを“犠牲”にする事で、現実へと戻る事が出来るのです。』

この世界のプレイヤーは一分されてこうわけだ。

互いが助かりたいと思うほどに溝が深まっていく、悪魔のシステム。皆、恐れているのだ。

明日、ゲームがクリアされて、自分が消えてしまう事を。

だからああやつて気丈に振る舞つて、不安から逃れようとする。

“ただの”デスゲームなら、こんな思いも無いだろ?』。

もしかすると、ペントンはとても人間的な機械<sup>A</sup>なのかもしない。

ふと思い至つた時、アラームが鳴つた。

午前0時を告げる音が部屋に鳴り響く。

ベットから体を起こすとアイテム欄から一冊の本とペンを取り出す。ギルドの連中には内緒にしてある。

あいつらに見られたらと思うと顔から火が出そうだ…。

日記なんてそんなモンだよな?

誰かに見せるわけじゃないけど書く、強いて言つなら自分に見せるため、みたいなモンだよな?

本を開く。

1ページ田には『“第10層 《ウォーラ》よつ”』とだけ記されてる。

いつも、ここで全財産の半分も使って買ったんだっけ。

その後も色々と書かれていた。

愚痴や喜び、痛み…。まるで昨日の事のよう思い出せる。

最後の1ページ、白紙のページ。

### 「 第99層 『エンダスタート』 」

これで、おしまいだな。

そうだ、『約束』。忘れるところだつたな。

『たとえ今日死ぬとしても、命尽きる前の瞬間までは全力で生きる。諦めた者に奇跡は訪れぬ。』

この本の持ち主との約束だ。

「奇跡か…。」

皆が笑つて終えられるハッピーハンド

奇跡があるところのなら、まさしくそれだらけ。

そんなものは無い。

解つてはいる。理解もしている。けど、

「 信じるのは自由だよな 」

独りじめて、眠りについた。

?

俺は今ゲームの中にいる。  
VRMMORPGってヤツだ。名前くらい聞いたことがあるだろ?

で、そのテの話には付き物の『ログアウト不可状態』だ。笑えねえ  
な、ハハツ。

ん?なんでゲームに閉じ込められるのに悠長に構えてられ  
るのか……か。

簡単な事だ。

俺は脱出不可能なゲームの中で、囚われの身、だからだ。

「ウオオオオオオツ……！」

走る。風を切るように走る。

「早くしないとおおおおおお……！」

俺の横で、同じく全力で走っているのは親友の姿。入念にセシトさ  
れていたであるうしんしん頭がグチャグチャになっている。しかし  
今はそんな事はどうだって良い。

「おー、貴史……今何時だ……？」

腕時計をチラツと見る貴史。

「あと五分！…ギリギリだ…！」

「チクショウ…急ぐぞ…！」

「わかつてらあ…！」

道を全力で駆け抜ける高校生の姿はさぞや恐ろしいものだろう。しかし、一つだけ断つておこう。

俺達はマトモだ。

いや、少々中毒気味のゲーマーである事は認めるが、何も気が触れた故の奇行ではない。

今日はVRMMORPG、“TwIn Genesis Online”の実装版解禁日であり、版から“TGO”をプレイしている俺達としては何としてもスタートダッシュを決めるたい。一秒でも早く家に帰りたいのだ。

考えてみて欲しい。

クリスマスの夜、プレゼントが待ち遠しくてなかなか寝付けない時のある高揚感。それに似た感情が昼休み辺りから胸を占めて、家に帰りたい衝動を自制心総動員でなんとか押さえ込んでいたのだ。

反動でこんな風になつても仕方無いのか？いや、仕方無い筈だ！！

ここから家まで約三分。部屋着に着替えるのに一分。間に合つか…

シャージ

！？

そこから俺は一切の思考を止め、力の限り走った。

「ただいまあツ！…」

母の『おかえり～。』といつも気な返事を待たずに玄関横の階段を一段飛ばしで駆け上がる。

「あと一分しかねえ！…」

ドアを開けると時計が田に飛び込んだ。タイムリミットまで時間は殆どない。

こうなる事を予測していた俺は予め用意しておいたジャージに着替えると、同じく待機状態でセットしておいたVR用機器“アナザー”を慣れた手つきで装着する。

制服が脱ぎ放しだが、この構つてはいられない。

起動スイッチをONにすると、突然睡魔に襲われ、意識が途切れた

気が付くとそこは闇の中だった。

『バグか！？おいおいマジかよ…。』と溜め息をつこうとしたその時、いつの間に現れたのか、田の前でピエロがこちらをじっと見て

いふのに気が付いた。

しかも光ってるよな、この人…。

真つ暗な中、電球のよう光り輝く姿は不気味をより一層引き立てている。

実装開始記念のイベント…なのか?

若干腑に落ちないまま、一言も発しようとしないペロロが口を開いた。また感じで問い合わせる。

「あのお…?」

すると、まるで彼の意を汲んだかのようペロロが口を開いた。

「一ツ、選べ、」

いつの間に取り出したのか、両手に小さな立方体の箱を乗せてこちらに差し出している。

「黒と白の箱…。」

やはりイベントの類だつたようだ。ホッと胸を撫で下すと同時に田の前の二つの箱を睨む。

「ううう…ッ!!

田を見開いてよく観察する。が、何も見えてこない。当たり前だが。

悩み処だな…。

貴史には悪いが、しばらく待つともう一つ事にならう。いや、アイツも今頃は箱と睨めつこの真っ最中か。

俺は、もう一度それらをよく見るためにペロロに向かって一步踏み出す。と、

コツ…。

何か硬いモノが右足の爪先に当たった。

「？」

何も無いよつだが…？

もう一度右足をシンシンと前に出す。

コツコツ、

やつぱり何かある。

しゃがみこんで足のあつた位置を手を凝らして探す。はたして 何も無いよつに見えた足元には、暗闇に同化していった“3つ田の箱”があつた。

透明な箱、硝子に似た硬質な素材でできているようだ。

「これでもいいですか？」

拾い上げたそれを振つて見せる。

「本当に、良インダネ？」

3つを見比べる。元から差し出されていた2つと下に転がっていた透明な箱。

勿論、生粋のゲーマーの彼がどの選択をするかなんて決まっている。

「ええ。」

「ソウカイ…マ、頑張リナ。」

辺りが眩い光に包まれていく中、ピヒロがニヤリと笑った、よう見えた。

気が付くとそこは野原だった。

辺りを見渡すと、他にも寝起きのように突っ立つたままのプレイヤーが数名。

どうやら無事に始まつたらしい。

視線を落とすと服装もジャージからボロい服  
初期装備になつていて、  
版の時と同じ

もう一つ気になるのは外見だが、よく考えてみると、確認の必要性が無い事に気付いた。

TGOではよりリアリティを追求するため、ゲーム開始前にプレイヤーの、顔も含めた身体情報を予めVR機器のハードの方へ入力している。それを採用している。

そこまで確認したところでまたしても視界が暗転した。しかし今は、版で経験済みのチュートリアルが開始したのだと解っていたため先程のように驚いたりはしない。

田の前で丁寧に解説されている既知の情報をスキップで飛ばし読みする。

この辺に性格が表れると言うが本當らしい。熱心に聞いているプレイヤーとスキップを連打するプレイヤーの2つに別れている。と言つても後者の数は圧倒的に少なかつた。

「おっ、貴史いるじゃん。」

少し離れた位置で予想通りチュートリアルを受けていた。

昔から説明書を読み込んでからゲームに取りかかるアソイツの性格のせいで何度もケンカになつた事さえあつた。

と言つても、もう何年も昔の話だ。俺だつていつまでもガキのままでない。とりあえずチュートリアルが終わるまでの間、システムウインドウを開いてステータスやら初期アイテムやらを確認して待つことにした。

まあ、確認と言つても初期ステータス位しか見るものないんだけどね。ほら、アイテム欄はこの通り空なん?

何かが右隅にひつそりと収納されている。サイコロ状の透明な箱をつき貰つたアレだ。

調べてみるか。

しかし、ちょうどチュートリアルを終えた貴史の呼ぶ声に遮られる形となつた。

なに、調べるのは後回しでも問題無い。それより今はMoba狩りが最優先事項だ。今日中に Lv5まで上げておきたい。

話し合いの結果、プレイヤーで飽和状態の草原を離れて少し難易度の高い森の方へ場所を移す事にした。

「それじゃあ俺がM○bのタゲ<sup>田標</sup>とるからメイトは背後に回つて攻撃してくれ。」

「了解、バリー。」

バリーは貴史、そしてメイトは俺のTGO内でのネームだ。バリーは昔いたスゲー野球選手から採つたものらしく、オンラインゲームではときどきこの名を用いている。

俺の方は“ナイトに成りきれない”というブラックジョーク的なものだ。何となくしつくり来たため使つてているだけで深い意味や拘りは無い。

おっと、<sup>コボルト</sup>早速のお出ましだ。

すぐさまタゲをとつたバリーが俺と向かい合つように移動、ちょうど敵がこちらに背を向ける形となる。

『いいか、L▼1の俺達がL▼4のM○bと真つ正面から勝負を仕掛けば苦戦を強いられるだろつ？だから殆どのプレイヤーはしばらく手を出さないはずだ。』

数分前に聞いた言葉を思い出す。

『そこでだ、真正面からじゃなくて背後から狙えば良い。』

コボルトの背を短剣で一閃。

甲高い悲鳴を上げてこじちらを睨む。作戦通りだ。

その隙に距離を詰めていたバリーがコボルトに斬りかかる。

一撃、二撃、三撃と放たれた攻撃はコボルトのHPを全て奪い去った。

無数のポリゴンとなつて消えたのを確認して二人はハイタッチを交わした。

狩りを始めてから三時間。リアルタイムで進行しているTGO内も現実同様日没寸前となっていた。

他のプレイヤーを見かけたのはつい30分程前の出来事で、それまではまさに独占状態だったため、予想以上の成果を上げることが出来た。

「今日はこんなモンだな。」

Lv8になつたバリーが、レベルアップを知らせるファンファーレの鳴る中、満足気に頷いた。

「そうだな、それじゃあ街でドロップ品の換金でもして落ちるか。」

「ついでに武器も見ようぜ?」

「だな、さすがに短剣一本じゃな。」

「 」のみすぼらじい服もなんとかしたいし。 」れじやまるでコジキだ。 」

ワハハハと笑いながら街を目指す俺達。

そう、その時俺達はまだ知らなかつたのだ。 これから起る出来事を、自分達の運命を。

『現在』

メイト L V8  
バリー L V8

?

「結構人いるな。」

日はすっかり落ち、辺りも暗くなっているにもかかわらず街はプレイヤーで賑わっていた。

フィールドへと繋がる街の大通りは人々の活気で満ちており、テスト時はほぼ皆無だった生産職の職人プレイヤーの姿もチラホラと見受けられる。

あ、あの食材見た事ないな。実装版の新アイテムかな？おつ！…あの斧カッカー…！？値段は……って三万！？あの職人正氣か…？

「メイト、余所見してるとぶつか

」

ドンッ

「きやつ…！」「おつと、」

『すみません』と叫ぶ直前、けたたましいアラーム音が街に響き渡る。

「え、何、WARNING警告？？？」

突然目の前に表示された赤色の警告文に目を白黒させる。

警告文は重大なマナー違反などを犯した時に現れる。

故意にならともかく、両者不注意でのアクシデント、それもぶつかつただけで表示されるなんてまず有り得ない事だ。

因みに、TGO内における違反行為の処罰は全てこのゲームのGMであるA.I.の裁量で決まる。例外として他プレイヤーへの違反行為を行つた場合は処罰の有無のみ被害者であるプレイヤーに決定権が託される。

流石にこの騒ぎで周囲も気付いたらしい。野次馬が集まり始める。

免罪なのだから別に気にする必要は無いのだが。

ほら、彼女だつてニッコリ微笑みかけて

“通報”ボタンを押した。

「ちょつ！？」

『なんで！？』と詰め寄る前に景色が薄くなつて行く  
“強制転送”だ。

視界が完全にホワイトアウトする瞬間、俺は見た。  
信じられないといった表情を浮かべたバリーが憤然として彼女に詰め寄つたのを。

呆然としたまま俺を見る彼女を。それはまるで重大なミスでも犯したかのような目だった。

「参つたな…。」

ここは牢獄の中。

迷惑行為を働くような集団のためのものであるのだが、実装版開始からものの数時間で十名弱が御用となつていて。

俺もその中の一人だが。

まさか自分がイエロー（マナー違反者のプレイヤー名の色が一定時間黄色に変色する事からそう呼ばれる。）になるとは……。  
確かに、プレイヤー間のトラブルは一律一週間の投獄ペナルティが課せられる。

『快適にプレイしていただくために』といふ企業側の配慮が今は憎い。

唯一、冤罪を晴らせば从此からおさらば出来るわけだが、冤罪を証明するには少々厄介で、先程ぶつかった女性の力が必要だ。

更に言うとこの牢獄、M〇bが出現するフィールドの中に存在する。流石に檻の中にまでは入つて来ないため急ぐ必要は無いが、彼らがここにたどり着くには最低でも一度はM〇bとエンカウントする事になるはずだ。この周辺にはLV5以上のM〇bがウヨウヨいるためたどり着くのは困難だ。

特に夜は攻撃的なモンスターが多く、LV10にも満たないプレイヤーがたどり着ける筈がない。

スタートダッシュを切つた自分でさえLV8の今、LV10を超えるプレイヤーが果たして何人居ることやら……。

居るならば、そいつは間違いなく現時点でのトッププレイヤーの一人だ。

「バリー、頼んだぞ……。」

唯一の頼みの綱である友人を名を呟くと、ウインドウを開いた。時刻は20時を過ぎている。予定時間も完全にオーバーしていた。きっと今頃は夕飯を食べに来ない息子を心配した母親が二階に上がって来ている事だろう。

早く戻らないと『夕飯抜き……』なんて事も……。

「でも、<sup>貴重</sup>バリーとの話」夢中で手に手をつけてないってのこ…ッ!!

バリーには悪いが先に落ちよつ。どうせ何も出来ないわけだし。

俺は《フレンドリスト》の一番上に表示されてる《バリー》の文字をタッチすると『今日は先に落ちる、スマン…』と書いたメールを送つた。

さて、落ちるか。

ウイングの左端下、《ログアウト》の部分をタッチしそうとした

「あれ?」

《ログアウト》ボタンが無い。

「あの…」

「あん? 何だ、兄ちゃん、改造データなら売れねえぞ? GMにそのテのモンは押収されちまつたからな

」

「いや、そんなんじゃ無くてですね、確認したい事がありまして。」

「確認だあーー？」

面倒くさいといった様子で顔を顰める。その表情が強面の彼の顔をより一層恐ろしいものにしている。

リアルなら関わり合いになりたくないタイプのプレイヤーだが、緊急事態だと割り切って会話を続ける。

「ウインドウのログアウト部分を見てもうえませんか？」

「ウインドウだあ？ 何なんだよ……たくよお。」

渋々、といった感じでウインドウを開いた。（他プレイヤーのウインドウは見えない仕様なのだが、手を宙にかざすとこうウインドウを開く時の動作から解つた。）

しかし、視線が左に動いた瞬間、表情が一変した。

「ログアウトボタンが……消えてやがる……っーービリビリ事だーー！」

バツと二ひらを睨み付ける男に応える代わり、天を仰いだ。

マジかよ…ツ…！

『すぐにでもGMにメールを』と、抗議のメールをうち始めた時だつた。

“それ”が漆黒に染まつた夜空に現れたのは。

「何だよアレ…？」

空より深い闇を纏つたそれは圧倒的な存在感で、暴力的とさえ呼べるものだつた。

— 1 —

その存在に  
呑まれて いた彼を 呼び戻したのは 硬質な 機械音

『グランドクエストを受注しました。』

確かに受注されている。

~~~~~

# ～グランドクエスト～

十の国の十の層、全ての門を開きし時、真の門は開かれる。  
門を開くは英雄の手。  
ゆめゆめ忘れる事勿れ。

行く手を阻むは一人の門番、避けては通れぬ定めなり。  
ゆめゆめ忘れる事勿れ。

命絶たれしその時に、魂は皆囚われる。  
眞の門が開きしその時に、全ての魂は解き放たれん。

（大予言者カツサンドラ最後の予言）

（（（（（（（（

なるほど、

「具体的な指示…なくね？」

「いか解り辛いな、オイ！！

「英雄…つてのは俺達の事か？門…はアレだから、門番はボスモンスターか。」

時の記憶を辿つて推理を始める。

「十の国、十の層はそのままの意味として……真の門つてのは…？」

まだ層があるつてのか？厄介な。

「兄ちゃん、バカか？」

先程の柄の悪いオッサンが絡んできた。

「真の門つてのはだ、このゲーム自体、つづつこつた。」

「オッサン……天才なのか！？」

人は見かけによらないこと言つが、本当だな！…

「ハツハツハ！…ちょっと考えりや誰にでも解るか、んな事。」

口ではせつ言つてゐるが、先程までの仏頂面が満面の笑みになつて  
いる辺り、どうやらまんざらでも無いようだ。

すつかり機嫌を良くしたオッサン（ダンパと名乗つた。プレイヤー  
名は表示されているから既に解つていたが。）は残りの解説もして  
くれた。

「ここの“魂は囚われる”ってこと、こじだ。これは“死んだらゲ  
ーム終了まで復活出来ねえ”って意味だ。ま、死ぬよりはマシだろ  
うがな。」

「へえ… てつきてテスゲームってやつかとばっかり…。」

「あ～、一応テスゲームではあるな。」

「どうこう事？？」

「いいか？“魂が開放される”のはいつだ？」

「ゲームクリアした時。」

「じゃあ、もしもだ。」

「？」

「全員が死んで、捕らわれの身になつちまつたり… どうなるよ？」

「そりゃあ……。」

「誰も復活出来ないから……つー?」

「一生閉じ込められたままー!?」

「そうなるな、」

「デスゲーム……。」

漫画やライトノベルで何度も読んだのを思い出した。  
主人公が活躍する様子を羨望の目で見ていた事も。  
これはチャンスかもしれない。

俺が、皆を救う。英雄になるチャンスかもしれない。しかし……。

「一週間のペナルティ……。」

このままでは、かなりの差をつけられる事になるだろう。  
いくら テスターとは言つてもすぐには追い付けないだろう。

それに情報だ。

なんと言つても情報は武器になる。

しかし、殆どの行動を制限されている牢獄内ではプレイヤー間で行  
われる情報交換のスレッドのアクセス権限が無いため、浦島状態に  
陥る事は必至だ。

重くのしかかるアドバンテージ。

「……拙くね?」

トップギルドが中堅プレイヤーになるまでどれだけ時間がかかるんだよつー?」

「ま、やるしかねえだろ。」

やるしかない。

「…………そうだよな、やるしかねえよな……よしつーーー！」

両頬を叩いて喝を入れる。

「その意気だぜ、メイド。」

鼻息も荒く意気込む彼を一ヒルな笑みを浮かべて見ているダンパだつた。

牢獄で過ごす事7日間、晴れて懲役期間を終えて街に転送された俺は、時からの行き付けの、NPC経営の酒場でアクセス権が回復したスレッジを貪るよつに片っ端から見ていた。

まず気になるのは現在の攻略進行度だが、なんと5層まで攻略済みらしい。

時は一週間かけて3層にたどり着くのがやつとじた事を考える  
と脅威的なスピードだ。

そして驚くべきはボスモンスターの攻略人数。

その数、たつたの8名。

次層へと繋ぐ門<sup>ゲート</sup>。その開門者の名を記す石碑が門の横にあつた事がそれを証明しているらしい。

8人での門番達を……？

正直、俄には信じがたい話だ。

デスマームと化した今、8人でボスに挑む剛胆さにも呆れかえるばかりだが、何よりもその実力はゲームバランスを崩壊せんばかりだ。

「 その8人が仲間割れしてるので見たあ？嘘くぞ…。」

『方向性の違いによる解散』

つて、歌手グループかよッ！

『ギルド分裂か？』

『ギルドリーダーとサブリーダーが新ギルド旗揚げ？』

『知り合いがギルド加入を打診された』など、眉唾モノな書き込みが多数。

一通り目を通した俺は、注文してあつたミルクの残りを一気に飲み干すと代金3ツーカーを払うためウインドウのアイテム欄を開く。

「あ～… そういうや換金まだだつたな。」

アイテム欄に収納されたままのドロップ品を何となく確認していると、

「これは……？」

アイテム欄の左端に表示されたそれは、初日見た透明の箱

で

はなかつた。

「sole ability ファントム」

これが俺の運命を大きく変える事になろうとはなかつた。

俺はまだ知ら

そういうばバリーは？

《現在》

メイト L V 8

?

「何で 『アビリティアイテム』 が……？」

アビリティアイテム 『アビリティ』 と呼ばれる スキル 技を修得するのに必要なアイテムの事だ。

基本的に高難易度のクエスト報酬であつたり、ポピュラーな物ならばNPCの経営する店で大金を費やす事で購入出来る物であるそれは、駆け出しの初心者が簡単に手に入れられる代物では無い。

「コストは 30！？」

アビリティにはコストと呼ばれる物が存在する。

コストとは簡単に言えば制限だ。

プレイヤーはレベルに応じたコストを持つており、スキルを修得する際に消費する。

一般的に高コストであるほど性能が良い。

初期で入手できるアビリティのコストは1か2、よくて3といったところだ。

時でもコスト5を超えるアビリティは見付からなかつた。

それがどうだ、目の前にはコスト30のアビリティ。

間違いなく上級アビリティにカテゴリーされるものだ。

初期段階でのプレイヤーの所持コストは20。LV5毎にコストは所持コストが5増えるのでLV10到達時に全コストを払って修得出来る計算だ。

因みにアビリティアイテムは修得するまで効果は解らない上に使いきりであるため、やり直しも出来ない。

『アビリティ修得に必要なのは金ではない。勇気だ。』と言われる最たる所以だ。

「……ま、急ぐ事もないよな？」

かくいう俺もその一人だつたりする。

べ、別に怖じ氣づいたわけじゃねーし！  
慎重さも必要だと思つただけだし！

とにかく！－まずはバリーと落ち合ひ事が最優先事項だ、うん。  
俺はバリーにその血を伝えるメールを送る事にした。  
なに、心配性なアソツの事だ。すぐに返信が

返つて来なかつた。三日経つてゐるんですけど…。

勿論、中堅プレイヤーとして頑張るのは解らんでもない。  
もしかしたら本当に“噂の10人”の誰かがバリーを勧誘していく  
も不思議ではないとも思つし、忙しいとしても責められる事じやないしな。

でも、三日間もメール無視する程の事つて何ですか！？

待ってる間ずっとレベル上げしてたらいつの間にかレベルも14になつちゃつたし、3層まで上がって来ちゃつたし……グスン。

「来るのはダンパさんからの裏情報ばっかだし…。ありがたいけどさ……ん、待てよ?」

ダンパさんにバリーの情報提供してもらえば良くな?

「何で早く気付かなかつたかなあ? これで良し!-!-!」

さあてと、それじゃあバリーを驚かせる用意でもしますか!-!

#### 第7層 『ネルバイン』

渴れ果てた大地に降り立つた5人のプレイヤー。

風格漂う彼らには共通点は見当たらない。武器、服の色、性格、容姿、どれをとつてみてもカブることはない。

白のロープを羽織っている事以外は。

その後ろを十余名のプレイヤーの列が続いている。彼らの羽織るロープは白一色で染まっている。

「確かに…“脱落者”はいないようですが……。」

「だから言つたじやん、コイツらも戦力になるつてさあー。」

「ギルメンいないの、後はお前だけだぜ、バリー？まさか、まだ仲間置いて来た事を後悔しているのか？もつ過ぎた事だらう？」

「関係無いですよ……昔とか、今とか。」

「てゆーかもう脱落してんじゃないのぉー？バリたんの知り合いさあー？」

「おー、レイナ！…」

「いえ、良いんです、ジャイロックさん。気にしてませんから、」

「しかしだな、バリー！…」

「とにかく落ち着いてください、らしくないですよー。」

「…………すまない、つい熱くなってしまった。」

頭を下げる。背丈が一メートル近くあるため、目線が同じ高さになれる。

「…………君の友はまだ脱落していないんだな？」

「ええ……そのようです。この前メールが来ました。」

「……………やうか。」

顔上げる。

「大切な、」

ポン、と大きな手を肩に乗せた。

「はい。」

彼の背中を見送ると、背を向けて歩き出す。  
目指すは第3層。

次のボス戦には参加出来ないかも知れないが、彼らなら自分が居なくとも大丈夫だろう。

「さて、メイトのヤツをビックリさせてやるかな

「ダンパさん、それ本当！？」

第3層の街の中心部、露店を開いている強面のプレイヤーに話しかけるメイトの姿を遠巻きに見守る人々。

本人は『もう馴れちまたよ。』と口では言っているものの、普段よりも虫の居所が悪いようで、どこかトゲトゲしさを感じる。

「だから何度も言わせんな。いいか、バリーってのがお前さんの連れなら、そいつは今トッププレイヤーの中の一人、『白騎士バリー』として絶賛活躍・躍・中だ！』

「バリーが……あの、噂の一人だつて……！？」

「にしてもまさか……あの『軌跡』の一人と知り合いとはな……。

なあ、良ければ　　「

『軌跡』は今は解散してしまった彼らのギルド名だ。

「情報なら売らないですよ、」

「チエツ……堅いヤツだなあ……。」

「俺のせいだアイツがP.K.にでもあつたらいと困つと……。」

「トッププレイヤーを誰がP.K.出来るんだつづーのは考え無かつたのか?」

「強いつていつても、数には勝てない。だろ?」

「お前さん、バカなのかどうなのかハッキリして欲しことこりだ……。扱いにくいつたらありやしねえぜ……。」

短く嘆息する。

「死なない程度にバカだよ。」

立ち上ると同時に、100ツーカー硬貨を指先で弾いた。  
宙を舞う金をキャッチしようと田で追うダンパに背を向けて歩き出した。

目的地は第4層 『リリナーーバ』、森を通り抜けるのに三時間、今からだとだいたい昼過ぎになるか。

アビリティ  
能力の効果を試すのにもちょうど良い。

親友との再会が、はたまた強力な能力を得た事によるものか、彼は浮かれているようだつた。

第4層 『リリナー・バ』、全ての家屋が藁葺き屋根という街の光景に『どこの昔話だよッ！』と突つ込んだ思い出の（？）土地にバリーが到着したのは午後一時。

約束の時間をピッタリだが、予想していた通り、メイトの姿はない。  
『うせその辺で路草でもくつてゐんだろうな…。

Mo・bの湧かない安全地帯の原っぱに寝転がつて暢気に待つことにした。

メイトとの対人術その1、『心配しない事。』

一方その頃、当人はといふと…

「昼に <sup>強化型</sup>  
ネオMo・bだと…？」

『ネオモス』 虫型Mo・b 『モス』の強化型だ。LVは17。  
イモムシに似た外形で正直、気持ち悪い。

斬つても変な液とか出ないだけマシか…。

片手<sup>ダガ</sup>短剣を両手に一本ずつ。“ツインダガー”と呼ばれるスタイルだ。

手数の多さと多彩な技で相手を翻弄する

クリティカルヒットが出やすいのも特徴の一つだ。  
難点は攻撃範囲の狭さ。

そのためか、あまり人気が無いようだ。

『ソロのダガー使い発見www』というスレを見た事がある  
が…酷いもんだったよ、ああ…。

感傷にふけりながらもネオモスの突進を避ける。（突進というより  
転がるに近いが、どうでも良い事だ。）

さて…と、一気に力タをつけるか。

『sole ability 『ファンタム』』

スッと、何かが体を包み込むのを感じ取る。

こちらを振り返ったM○bが、キヨロキヨロと辺りを見回し始めた。

よし、上手くいったな……。

これが、アビリティ『ファンタム』の能力の一つ、“透明化”だ。

『ファンタム』は“隠蔽スキル”と“索敵スキル”をMax値まで  
引き上げる能力で、短剣の弱点である攻撃範囲の狭さを補つて余り  
ある超級スキルだった。

透明化の時間は短いものの、発動制限が無いため問題は無い。何度も透明化すればよいだけの話だ。

水泳でいう息継ぎの回数が多い、といったところか。

ゆっくりと背後から迫る。が、気付いていないようだ。

森の奥へと戻つて行く敵の背中を斬りつける。赤いエフェクト、クリティカルヒットだ。

突然のダメージに混乱したネオモスは、最早メイトの敵では無かつた。

「大遅刻だ……。」

待ち合わせの場所に着いた時には午後4時をまわっていた。

調子に乗つて暴れまわつたのが理由だろうな。おかげでLV18だ

よーー

うん、解つてる。早くバリーの所に行つて土下座しないといけない事くらい…。トッププレイヤーから命狙われるつて、洒落にもなりませんからね、ハイ。

つてなわけで、待ち合わせの広場に向かつたわけだが、

誰もいませんでした。

代わりに素敵なメールが一件。

~~~~~

今日は一時間待っても会えなくて残念だけ、  
次は会える事を信じて楽しみにしてるから。

あ、ちなみに今「32だから。

脅かそうとして、間違つて安全圏外で攻撃しても怒らないでくれよ  
(笑)

それじゃあ、バトル楽しみにしてるから。

~~~~~

もつ懸す気もないみたいですね、ハハハ……。

今日は徹夜でレベリングしようとして……。

《現在》

メイト L v1.8

?

バリーからの恐怖のPK予告メールから1週間が経った。

正直、あそこまでレベル差があるとは思つてもみなかつた。

Lv32つて、まだ10層も攻略してないんだぜ！？

Lv200が上限つて言つてもいくら何でも…なあ？

だからつてわけじゃないんだが、この1週間、俺はレベリングに徹したわけだ。

その成果だが、フフフ…見よ…lv24の輝きを…！

わざわざ8層まで行つて山籠りした甲斐があつたといつものだ。うんう。

さて、1週間も情報を断つとすっかり浦島状態だ。

街に行つて見るか、うん。

食糧も空きたし、換金と武器修理もしなきゃな。

## 第8層 『マルロー』

山々が連なつて形成されたその層は飛行能力を持つMobが出現する。

時では結構苦労させられたものだ。

まあ、強力スキルを携えたLV24の敵じゃなかつたがな、ハツハツハ！－！

おつと、いけない。話が逸れてしまった。

えーと……そうだ、街だ、そう、街。

こここの街は見つけるのに苦労させられた。何時間も歩き回ったのに見つからないぐらいだから、相当な苦労だ。

『さぞかし皆も苦労したんだろうなー。』とか思つたんだが…

スレッド見たら一発でした。

『第8層、街までのナビゲート』だつてさ。入口から街までのルートが懇切丁寧に書かれててまあスゴい－！  
出来れば数日前に知りたかったぜ、ブラザ－－！  
あ、スレ主は女性か。まあいいや。

それと、どうやら第10層攻略だが手詰まりらしい。  
噂ではとんでもなく強いんだとか。  
今までの比じゃないらしい。

『次国への門』だからと言うのが有力説だ。  
この世界は十の国に分かれている。  
計算通りなら今回が国と国を繋ぐ門、次の国への門、『次国への門』  
というわけだ。

なんにせよ、中堅プレイヤーの俺には縁遠い話だが。ん？バリーを

助けないのかだつて？

俺だつて助けてやりたいさ、そりやあな。親友なんだから。

でもな、これは『テスゲームだ。

死んだら終わり、即終了だ。

中途半端な力を付けたところで最前線には立てない、資格も無い。

だからこそのレベリングだ。

とりあえず、最低限の力は身に付けた。

次のステップに移ろうと思う。

“ボス戦の雰囲気に慣れる事”

ダンパさんに指摘されるまで全く気付かなかつたのだが、俺にはボス戦の経験が無い。

そこで、クエストの中ボス戦に挑む事にした。

“TGO”には“グランドクエスト”以外にも多数のクエストが存在する。

モンスターの採取、討伐、交換、etc.

その数は数え上げたらキリが無い程だ。そして、今回挑む中ボス討伐は、グランドクエストたる門番の討伐に次ぐ難易度と言われる上級クエストだ。

当然の如く、一人用クエストではない。

これは数少ないギルド用クエストなのだ。

ソロプレイヤーである俺は、“同志”を募らないといけない。

『信頼出来る仲間を見付けるのも強くなるつて事よ、どんな化け物

だつて一人じや限界がある。中堅プレイヤーなら尚更だ。』『  
のはダンパの言葉だ。

情報屋を営む傍ら、自らの命を守るために身に付けた両手斧捌きは  
攻略組顔負けだ。

出来る事なら彼にも手伝つてもらいたかったのだが、彼は『チョ  
ッパチョップス』という中堅プレイヤー内では名の知られたギルド  
のリーダーだ。

ギルドリーダーがギルドを脱退する事は出来ないため（仮に、ギル  
ドリーダーが脱退すると、ギルドそのものが消滅してしまつシステ  
ムだからだ。）自力でなんとかするしかない。

頼る宛などあるはずも無く、結局ダンパさんのアドバイス通り、酒  
場に行く事にした。

カラソカラソと扉に取り付けられた鈴の音が店内の喧騒に下記消さ  
れた。

ギルドメンバー募集欄があるって言つてたけど……アレか。

薄暗い店内で淡く輝くホログラム

ビックリと書き込まれた募集要項や条件に目を通す。  
本の活字みたいで目が痛くなりそうだ。

「見ない顔だな、新入りか？」

中腰のまま振り返ると三人組の姿が目に入った。

先頭の、話しかけてきた男がどうやらギルドリーダーらしい。

頭上に表示されたプレイヤー名の横に王冠のマークがついている。こうした事は後ろの二人は彼のギルドのメンバーということだろうか、人懐っこさを感じさせる笑みを浮かべる青年と一人の陰からこすりを伺う眼鏡の少女も、自分と同年代だろう。

「前衛を探してるんだが、どうだ？」

願つても無いチャンスだ。

今すぐにでもOKしたいところだが、ここは勿体ぶつた態度を見せるのが一番だ。ダンパ曰く『舐められたら負けだ、取り分も減らされちまう事だつて無いとは言い切れねえからよーー』との事。

「詳しく聞かせてもらおうか？」

ちょうど空いていた四人掛けテーブルに腰を下ろすと三人もそれに倣つた。

「自己紹介がまだだつたな、俺はバーク、こっちのがマイルで、リザだ。ま、上に表示されてんだけどな、」

笑顔の青年、眼鏡っ子を順に指した後、目線を真上に向ける。

「メイトだ、こちらにようじく。」

『よろしく！』と、威勢の良いマイルの挨拶とは対照的にリザの挨拶は会釈だけに留まった。

「で、メイトは前衛なんだよな？何使ってるんだ？片手剣か？両手

剣？斧とか？

ズイツと顔を寄せる。

まるで少年のような、純粋な瞳。隣に座っている一人もジツと言葉を待っている。

「ツ…ツインダガ…。」

思わず口ごもる。

両手短剣は人気が無いというスレを思い出しての事だ。  
尻すぼみになってしまったため、『なんて？』と、首をかしげている。

「両手短剣、だけど。」

つまりながらも伝える。

きっと、『短剣は無えなあwww』と一笑に臥して去ってしまうだらう。

そう覚悟したのだが、

「ふーん、珍しいな。で、熟練度はどんなんもん？マッチョーネ武器適正率はB以上だと

「待つた待つた、」

「なんだよ？まさか、適正率C以下なのか！？そりややめた方がいいぜ、メイト。適正率低いと武器の性能引き出しきれないないからな、」

「さうじやなくて…！」

ガタツ！…と音をたてて席を立つ。

驚いた様子で見上げる三つ顔。ポカーンといつ擬音がピッタリの表情だ。

「短剣だぞ！？スレで叩かれまぐりの、短剣使いだぞ！？」

つい、声を張り上げてしまった。

内容も内容だ、自分の首を絞めるような真似までして

「そりなのか？じゃあ問題ねえよ、前衛なんだし。ってか、早く教えろよ～、この際熟練度だけでいいからや～？」

『やうだやうだ～！～』と後ろの一人も口をこんな風に尖らせ  
てブーブーと言い出した。

「本当に、いいのか？」

「良いつて、そんだけのレベルに上げれるつて事がメイトの強さの  
何よりの証だよ。それとも厭なのか…組むの…？」

「いやいや、全く…」

ブンブンと勢いよく首を横に振る。

「よひしく頬むよ、

それから四人で作戦会議を行つた。

今回は中ボス討伐、と言つても第一層の、だ。

当初の予定の第三層の中ボスは石像のようなM o bで、時代、見た目通りのあまりの堅さに十人がかりで一時間かかった事をメイトが進言すると、三人は手のひらを反したように意見を変えたのだ。

「だつて、ウチのギルド、ダメージディーラーいないし…。」

口数の少なかつたりザも警戒心を解いてくれたのか、徐々に発言するようになつた。

「そついえば、皆は何を使つてるの？」

「銃！」「杖…」「盾剣」

「杖か、リザは何魔法が使えるんだ？」

「支援系と回復系なら…」

『かなりの腕前だぜ！あ、攻撃系は水属性以外はサッパリだけどなwww』と、バーク。

なるほどな…。

追いかけっこを始めた二人を横目に情報を整理する。

彼らが扱う3つの武器は全て後方支援や壁用の武器だ。

ちなみに盾剣というのは片手剣と盾という事。

マイルは前衛だが、壁役でもあるため、中々攻撃に回れない。確かに、前衛が足りていない。

逆に言うと、強力な火力さえいれば、かなり上手く機能するはずだ。

「コレ、俺の武器適正と片手短剣の熟練度。<sup>マッシュチラー</sup>」

途端に、走り回っていた一人が駆け寄る。

「武器適正S！？初めてみたよーー！」

マイルが田を見開いて驚いている。

「熟練度561って、お前…無茶苦茶だな、本当。」

「攻略組レベルだよね、完全に…。」

苦笑いするリザ、口元が引き攣つっている

「時代から使ってるからね、適正にも加味されたのかも。熟練度は剣振つてれば上がるし。」

最初の1週間、牢獄に閉じ込められた俺はガムシャラに短剣を振るっていた。

その後も早朝は剣を振るようにしていたのだから、中堅プレイヤーとは一線を画しているのは当然といえば当然。

「これなら一層の中ボスなんて余裕だなーー！」

「ああ、この層のネオ系の方が強いぐらいだよ。」<sup>強化型M〇〇</sup>

実際に対峙したわけではないが、攻略スレの情報から考えるとそういう。というやや正確さに欠けたものだが、しかし今は士気を高めるのが最優先事項だ。

「それじゃあ経費の方だけど、移動には転送装置を使うとして…、  
回復薬とMP回復薬の費用は折半で良いかな？」

「マイルの申し出に一同は一様に頷いた。  
「ボスドロップのユニークアイテムは取ったモン勝ちだ。あとで揉めないようにな。」

ユニークアイテムはボスなどがドロップする装備アイテムで、他の入手方法が無いのが特徴だ。その効果は様々だが、高い性能を持つ。発言者であるバークが一同を見回したが、これに対しても舌を噛める者はいなかつた。

「それじゃあ、今から30分後に転送装置前に集合だ。それまでに各自準備を整えておくよーに。」

ゴホン、と咳払いをしつつ胸を張るバークを指差したリザが耳打ちする。

「本人はあれで威厳たっぷりのつもりなんだよ。」

『むしろ逆効果だよね?』 といつ彼女の問い合わせに対して俺は曖昧に笑うしかなかつた。

武器耐久度も万全だ。

「現在」  
トランジットゲートの設置されている中央広場までは五分もあれば着く。

「行くか。」

メイト  
LV24

?

## 第一層 『イゴーニア』

常に空が赤い事さえ除けば中々素晴らしい場所だ。

不思議な色彩の空に倣つたかのように鮮やかな朱に染まつた紅葉と時折吹く冷たい風が現実世界の秋を連想させる。

また、高所から見下ろすと本来ダンジョンたる森の中心部にある部分に街が鎮座しているのが解る。

街に一分された森は いや、“大きな林”と形容する方が適切かもしれない。それらは小さなダンジョンで、今回彼らが向かうのはより小さい方、街の東に位置するダンジョンだ。

一つの森に生息するMobsのレベルはほぼ同程度、若干東の方が高いぐらいだ。

しかし、決定的な違いはダンジョンの最奥部、所謂ボス部屋だ。西側は次の層に続く門を守る門番がいるため、他の部屋の三倍はあらうかという大きさであるのに対し、東側の中ボスが待ち構える部屋の大きさは通常の大きさと大差無い。

これは門番が複数のギルドを連結したレイドで挑む事を前提としている事、そして中ボスにはレイドでの挑戦不可というシステムに起因する。

デスゲームと成り果てたTGOにおいて、会社側が設定した目安など全く当てにはならない。

『死者を一人も出さない』といつ暗黙の了解の下、導き出された安全マージンは

であり、中ボスに関しては階層 + 15、門番に挑むなら階層 + 20 のレベルが条件とさえ言われている。

メンバーが四人である事とパーティ構成、レベルを考慮すると、やはりこここのダンジョン以外の選択肢は無いようだ。

俺としてはむしろ有り難い話だけどな。

“ボス戦の感覚を掴む”事が今回の目的であり、そのために連携プレイのいろはを学べる程度の余裕があるのは彼の望むところである。それに、

そういうえば、こうして誰かと“ゲームをする”的で、久し  
ぶりだな…。よし…！

「それじゃあ、元気出して行け!」

「おじメイト、そんな急ぐなよーー！」

「足元見てないとトラップに  
！」

「うわッ！！矢が飛んで来た！？」

「先が思いやられるわね……。」

ボソリと溢れた不安はメイトの呟き声に搔き消された。

数分後、落ち着きを取り戻して一言。

「 どうやら俺は」の森の神の逆鱗に触れてしまつたようだ。  
すまない…皆…。」

「 一人ではしゃいで低級トラップにかかつてただけだろッ…。」

「 メイト、ちよつとふざけ過ぎだよ?」

「うわあ…マイル、笑顔だけど青筋が…。」

「メイト、おバカさんなの?」

「 「リザ…!」」

二人が彼女を叱りつけた。まるで『本当の事言つたら傷付くだろッ  
!…』と言わせているようだ。

しかし、不本意ではあるが非を認めるのが大人というもののここは  
頭を下げる事にしよう。

「いや、俺が悪かった。誰かとこうするのも久しづりだつたからさ  
…。それでもちよつと浮かれ過ぎたよ、ゴメン。」

頬を搔きながら苦笑する。

「 … (ボツ…!)」

「？」

何故か顔を赤らめている。眼鏡の奥の栗色の瞳が忙しなくキョロキョロと動いている。

「べ、別に解ればいいのー！……ほ、ほらっ、早く行くわよー！？」

「なあ、リザはなんで怒ってるんだ？」

先頭を歩き始めた彼女に聞かれないよう一人に訊ねてみたが、たたか無言で肘で小突くだけだった。

奥に進むにつれてだんだんと薄暗くなっている。本来の空の色からしてこの視界の悪さは有り得ない。恐らく目的地に近付いている証拠だ。

「なあ、皆。」

「ん？」

油断なく視線を左右へ走らせたまま応答する。

「変だと思わねえか？」

「何が？」

「」  
「」

遭遇

よ、

「……。」

「……。」

「今にも集団で襲い掛かってくるんじゃねえかなー?なんて、  
」

その瞬間、いくつかの変化がもたらされた。

一つ目は空、この層に於いては決して訪れるはずの無い、闇。

二つ目は重圧、前方から圧倒的な“何か”が見下ろしているのを四人は感じ取った。

三つ目、“死”の足音。

「後ろに飛べえええッ！！」

気付くと後方へと飛び退きながら大声で叫んでいた。

目の端で三人を捉える。全員間に合つたようだ。

数秒前まで彼らが立っていた場所には七本もの槍が突き刺さっていた。

まともに当たつていたらとすると背筋が凍る。

まさか レッドギルド!?

突如現れた七つの影は槍を引き抜くとこちらに近付いてくる。

はたして それらは人では無かつた。

今は見えない空の色と同じ赤い眼、前進黒い体毛で覆われたそれは  
獣人型M o b 『レッドブル』。大きく突き出た一本の角は猪のそ  
れに酷似している。

頭上に光るHPのバーの横にはモンスター名とレベルが表示されて  
いる。

平均でLV13。一見、大した事は無いように見える。が、しかし  
問題はそこでは無い。

「何でレッドブルには群れる習慣は無いはずじゃ…。」

そう。通常M o bは獣人型や亜人型などの人には群れを成す性質を持たない。

確かにレッドブルは獣人型にカテゴロリされるが、群れを成す性質は  
無い。

しかし、唯一の例外がある。

「まさか、ネオが…？」  
強化型

「レッドブルのネオ！？聞いたこと無いぞ！？」

そう、レッドブルの強化型を見たという話は聞いた事が無い。

そもそも強化型の存在する固体の数は全体の三分の一にも満たない  
ため、存在するかどうか怪しいのだ。

だが、

「『ネオブル』……ツ…！」

上級アビリティ 『ファンтом』によつて 『索敵スキル』がMAXまで引き上げられた彼の目は、三メートルに迫る巨体の獣人モンスターが仁王立ちしている光景を映し出していた。

「リザ！…支援魔法をツ…！」

「解つて、ブレイブパワーツ…！」

既に杖を構えて魔方陣を待機させていた彼女が声を発すると、魔方陣が回転を始め、赤い光が四人を包み込む。筋力値ボーナスの魔法だ。

続いての魔法、『エアアーマー』はダメージを軽減する強化魔法。

単体強化であるため、全体強化魔法より効果が高い。

青いエフェクトが一瞬視界を過るのを確認すると、メイトは全力で駆け出した。

後方、入口の方へと。

「スマンツ…少し耐えてくれ…！」

「な、ななな、なつ…？」

三人が同時に口をパクパクし始めた。

『なんか金魚みたいwww』などと考へている場合では無い。

「信じろツ…！」

取り残していく三人にそれだけ告げると筋力にモノを言わせて大きく跳躍、飛ぶように木々の間を走る。

一刻でも早く戻りたいという気持ちを押さえ込みながら走り続ける。

仲間を助けたい。

だからこそ今は距離を取らなければならない。

相反する二つの思いを抱えながら、走る。

「クソツー！」

二丁拳銃が火を吐く。両弾頭部に命中、クリティカル判定。残りはレッドブル四体と未だ沈黙を守るネオブルの計五体。

前衛のマイルが槍で牽制している。

ここからでは見えないが、この瞬間は彼の顔に笑顔は無いだろう。回復魔法の魔方陣を待機させながら背後に意識を向ける。しかし、何かがやつて来る気配は感じられない。

「……あんなヤツを信じた私がバカだつた……ツー！」

強く唇を噛む。ピリツと痛みが奔る。

そうだ、忘れてはいけない。これは既に単なるお遊びでは無い、この痛みも、死も、現実なのだ。

知り合つたばかりの男とギルドを組む？

逃げ出した人間の都合の良い言い訳を信じじる？

間抜けな自分が厭になる。

「バイヒール！！」

全体回復魔法、縁のエフェクトが一陣の風のように吹き抜ける。HPバーのゲージがMAXまで引き戻される。同じく、横に立つバークもHPは満タンだ。

しかし前衛で支えるマイルのHPは七割弱、やはり、この数を一人で支えるのは厳しいようだ。ネオブルが一切の動作を見せないのも気になる。

「リザー！」

「え？」

頭上に、黒い点が、あつた。  
それはだんだんと大きくなつて 気付いた。あの点は一本の槍だ。

ネオブルが獰猛な笑みを浮かべていた。ゾッ！…と背中を冷たいモノが奔ると共に彼女は悟つた。

ああ、死ぬんだ、私……。

二人が必死に叫んでいるのが見える。

それなのに、彼女の耳には何も届かない。

人は死の直前、時間を実際の何倍にも体感すると聞いた事があるが本当らしい、<sup>死</sup>槍がゆっくりと近付いて来るのが見える。

この時リザは、死を悟った大半の人間と同じく不思議と穏やかな気分だった。

ゆっくりと目を閉じ、死が訪れるその瞬間を待つた。

お待たせ、

死が、彼女の肩を叩いたのだと直感した。  
優しい、男性の声。“アイツ”の声。

裏切られたのに、私つてばバカみたい……。

しかし これが“死”というものなら、案外悪く無い。痛みも  
感じない。

意識だつてほら、こんなにもハッキリと 、

薄く瞼を開く。そこには、

呆然と立ち尽くす二人と、独りでに消滅していくレッドブルの姿があつた。

「何、これ……。」

ネオブルが暴れ出した。

木のような太い一本の腕をガムシャラに振り回している。

虫でも追い払うかのような動作、しかし背中から発する青白いエフ

エクトが確実にHPを削つていいく。

何分間そうしていたのだろう。

ついに抵抗を止めたネオブルのHPバーは完全な白に染まっていた。パリンッ！！という硝子が割れるような音と共に無数のポリゴンの粒子へと変化するのを見届けると、地面にへたり込んだ。

状況が掴めないまま、今更思い出したように自らの頭上に輝くHPバーを見上げる。

一ドットも減つてはいない。

それどころかレベルが上がっている。

「どういう事……？」

ネオブルの大槍が迫るその時まではレベルアップの通知は無かつた。つまり、レベルが上がったのはそれ以降という事になる。

だが、それは有り得ない。

TGO内でプレイヤーが経験値を手に入れる方法は次の三つに限られる。

- ・Mobを倒す、または他プレイヤーが倒したMobにダメージを与えていた時
- ・特定のクエスト報酬
- ・ギルドメンバーがMobを倒した時

あの時点で、残りの四体は無傷だった。自分が経験値を獲得するには残りの二人がトドメをさす以外に方法は

「もしかして、メイト…？」

そう。あの攻撃の正体がメイトによるものならば説明がつく。  
ただ一点、問題があるとすればそれは当の本人の姿が見当たらない事だ。

弓矢やバークのような銃を使えば遠距離からの狙撃も可能だが、昼間見た彼の遠距離系の武器適正は決して高くは無かつた。  
アイテムを取り出すために開いたウインドウには半径300メートル圏内のプレイヤーとMobsの情報が映し出されていたが、彼の反応は無かつたため、その可能性も低い。

それでもあの瞬間、確かに彼の声が聞こえたのだ。今でも耳から離れない、優しい声が。

「居るんでしょう？ねえ、」

応答はない。返つてくるのは風に揺られた木の葉の擦れる音だけ。

「 そっか、」

違つたんだ。

やつぱりアレは、貴方じゃないんだね、メイト……。

「 戻る。」

溢れ出しそうな涙を堪えて来た道を戻る。

嘘つきイ……！！

溢れ出す涙を拭う。

それでも止まらない涙が頬を、大地を濡らす。

「ごめんな、恐がらせて。

ポンポン、と誰かの手が頭を撫でた

気がした。

メイト　　！？

振り返る、しかし、そこには何も無い。

「リザーッ！－－遅エゼーッ！－－」

「　　ごめん、今行くーッ！－－」

走り出す瞬間、一瞬だけ　　いや、さつと氣のせいだ。

「　　今度会つたらただじゅ　おかないんだから……ッ－－」

誰にも聽こえない小さな一言を残して、駆け出した。

言つたか……。

三人が去つて行くのを見届けて、大きく息を吐いた。

結局また独りだが、昨日までと同じ。ただ戻つただけだ、彼らを救

えただけ良しとしよ'う。

先程の現象は勿論、怪奇現象やバグなどでは無い。彼の仕業だ。

アビリティ 『ファンタム』、敵味方問わず欺く“幻想”の力。

隠蔽スキルをMAXまで引き上げられた彼の姿を捉える方法はただ一つ、視認する事。

ネオブルが動かなかつたのは彼から視線を外さないため。

彼の持つ能力をどんな方法で察知したのかは解らないが、透明化を発動するための条件、“全員の目を逸らす”必要があつた。どうあつても視線を逸らす気は無いらしいと判断した彼は一度、戦線を離脱する事を決断したのであり、決して逃げたわけではない。

と言つても、説明する必要もするつもりも無い。

自分のせいでのこれ以上誰かを危険にさらしたくは無い。  
このまま恨まれ役を買つた方がずっとマシだ。

「さて、それじゃあ中ボスでも見に行きますか、」

ギルド追放は加入から最低でも6時間は認可が降りない。つまり後三十分は余裕があるわけだ。

「あ～あ、四人で戦いたかったなあ～ッ！！」

数分後には切れるだろう支援魔法の赤と青の光。今にも消えそうな淡い光が、突然強さを取り戻した。

強化魔法の継続。つまり、“術者が再び魔法を発動した証”。  
まるで『お見通しだよ?』と言わんばかりだ。

「 ハハツ。ありがとう、リザ。」

そう独り言ちて、強く大地を蹴り上げる。  
森を駆け抜ける彼を包む一筋の光は、まるで誰かが寄り添っている  
かのようだった。

『現在』

メイト L v25

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7157y/>

---

Twin Genesis Online

2011年11月23日18時54分発行